

# 子供の教育

(1969年5月号)

Journal of the Association  
for Childhood Education

一九六九年五月号の巻頭論文は、ニュージーランドのグレイ氏による「あそび場での創造的学習」と題する論文である。あそび場の研究者である同氏は、本論文において、あそび場が真に子どもの生活と創造の場、となるために必要なこととが、必要な遊具について具体的な助言を与えている。

子どもは走ったり、ぶらさがったり、とんだりはねたり、たえず身体を動かし続けているが、このような子どもの動きにふさわしいあそび場を用意するためには、都市と農村が互いに子どものあそびを交換し合うことが大切である。都市のあそび場の設計者は、田舎の子どもが自然物を活用してあそぶようすからたくさんヒントを得ることができるであろうし、同様に、農村の子どもには技術を要する複雑な遊具を与えてあそびを刺激することができる。しかし、今日の都市には、自分ひとりになったりひとりで何かする空間、大きな音をたてのびのびできる場所を求めることができないので、都市のあそび場は、狭い場所であくさんの

ことができ、しかも子どもの要求を満たすという条件を加えなければならない。

グ氏は、ショッピング・センター前の歩道でもくふうしだいでは立派なあそび場になるとして、いろいろな形をしたいろいろな大きさの色のついた道路、さまざまな色と形の電柱、穴があいていたり所々に鏡のついた壁等々、たくさん具体例を示してその可能性を論じている。

子どもは、常に何ものかに向かって挑戦しそれによって成長している。創造的で革新的な子どもにふさわしいあそび場には、子どもが挑戦できる遊具を備えなければならぬ。しばしば目にするプラスチックやスベリ台、ジャングルにコンクリート製の筒は、グ氏によると、どれも子どもを受身にし無気力にし形造る喜びを奪う遊具ということになる。

なぜなら「ジャングル・ジムであそぶ子どもを見てごらんさない。すべて同じ大きさの柵目で作られ、たても横も同じ間隔である。従って、第一歩をふみ出せば後の動きは単なるくり返えしにすぎない。冒険がないのである」

これに反して、同じ登るのでも木登りには挑戦がある。「どんな角度からどんな登り方をしどんなステップをふもとも、登る者は木と対話しなければならぬ。登る者と木との個人的交渉、登る者は木の一部であり、上にすすむにつれて木は登る者の知覚の一部に変わる。……思考と知覚と当惑と判断とがどの一步にも要求されるのである」登る、とぶ、すべるといふ身体活動を駆使し、思考と知覚と判断によって挑戦できるものが、自然物の中に、あるいは自然美を基調とした遊具の中にある、とグ氏は主張するのである。

さらに、その遊具が動くものであるなら、そして動く遊具をいっしょになって考えてくれるおとな（指導者）がいるなら、子どものあそびは深まり、活動の範囲も拡まることであろう。指導者がいなくても、適切な遊具を用意することにより、たとえば、色の明暗、配合など（戸外のあそび場は特に無視している）に注意するなら、子どもの遊びを高揚させることができる。濃い土色の赤をぬったと

ころでは、子どものあそびが活発であったという報告もある。

最後に、グ氏は、本やレコードの図書館のように遊具のライブラリーの必要性をとき、遊具とその使用法の開発がすめば子どものあそび場は地域社会の進歩の象徴となり、あすの社会の創造の場となるであろうと結んでいる。

あそび場や遊具に内在する多くの可能性を具現しようとする人々にとって、本論文は大きな示唆を与えるものと思われる。

次に、オズボーン・ヘイル氏の「テレビ暴力」という論文は、テレビがいかに多くの暴力番組を流しているかを実証し、子どもへの影響について論じた刺激的かつ時期に合った論文である。

ロバート・ケネディ、マーチン・ルーサー・キング牧師の暗殺事件後行なったクリスチャン・サイエンス・レビューの研究によれば、一週間に、八十二の殺人と三百七十二の暴力行為がテレビに写され、七時半から九時までのいわゆるゴールデン・アワーには平均十六・三分に一

度の割合で暴力場面が出現しているということである。（一九六八年七月調査）

また、ニューヨーク市の連邦両親協会調べでは、TV視聴の重症児は五・六歳の子どもに多く、彼らの視聴時間は平均四時間であると報告している。ジョンソン前大統領は、このような事態を重く見、「暴力の種子は、電波を通してばらまかれている」のか否かの調査を要請した。

これに答え、秋には主なテレビ会社が相次いで、暴力番組の減少を報告しはじめたのである。これに関連して、オ氏は、一九六八年の十月と一九六九年の一月の各一週間について調査した結果、十月と一月の殺人場面の合計は百八十三で、クリスチャン・サイエンス・レビューの調査に比べ半分に低下し、テレビ会社の言葉を裏づけている。しかし、殺人は一時間に一件、暴力行為は二十二分に一度の割合で出現しているという事態は変わっていないと指摘している。

このようなテレビ番組は、子どもにどのような影響を与えるのだろうか。現在

これをはつきり裏づける正確な資料はないが、非常に多くの親から、テレビを見て興奮すると子どもは寝つきがわるくなる、悪夢にうなされる、などの報告がなされている。このことは、とりもなおさず子どもに何らかの影響を与えていると見てよいものである。そこで、オ氏は、両親が子どものテレビ番組のモニターになると同時に、おとなもそうした番組を見るのを自しゆくするよう呼びかけている。

一方、両親にすべての責任があるわけではなく、何といってもテレビ会社自体が、暴力場面を減らそうという確固たる立場をとる必要性と、公共の電波を使う者は、それを見る大衆（影響を受けやすい子どもも含めて）に責任をとる必要性も強調している。

本論文は、国会議員にも送られたものであるが、わが国でも真剣に考えなければならぬ問題の一つである。

エディス・マルゴリン氏の「現代幼児教育における論点」では、現代における幼児教育の問題として次の五つをあげて

いる。

第一は、誤った二分法によって知的な追求と冒険的な遊戯活動とを対比して論ずること、第二は、児童における美的感覚の発達の研究に対する助成金の少ないこと、第三は、児童期に対する狭い見方、すなわち児童期は成人になるための準備期とみる見方の支配的なこと、第四は、幼稚園の教師が、幼児との接触の中で子どもを知るきわめて有利な立場にありながら、そこで得た知見は現場研究者の前に投げだされないでいること、第五は、後継者を養成する意味からも、幼児教育界は哲学者をも含めて意見を統合し、一定の方向性を出してみること。このようにいろいろな立場を論じ評価する活動が、内外で盛んになることが幼児教育の発展に重要であろうと述べている。

エディス・ドウリーの「子どもの行動観察の手がかり」では、観察上の基本として、

・観察者は目立たないようにする、  
・子どものいったりやったりしたことすべて、話しかけられたことのすべて、

ジェスチャア、表情、動きを完全に記述すること、

・子どもを見て学ぶこと、心を開いて子どもの行動を判断したり批判したりしないで行動を受け入れること、  
の三つが必要である。

次いで、具体的な記録を引用しながら観察における三つの段階について述べている。第一の段階は、子どもが今何をしているか記述する段階である。ここでは、子どもの主な動きや特別の身体運動に焦点をあてて記録するのが普通である。第二の段階は、子どもが今どういう気持ちでいるかを記録する段階である。行動の質ないしは内容に触れる記録で、ここでは、子どものいった言葉や外からみえる行動を単に書きとめるにとどまらず、子どもの喜びや失望をあらわす表情や身体つきといった微妙なことまで記録することが要求される。

五月号にはほかに、二ヶ国語を話す子ども、ドモリの子どもの問題を扱った論文と、慣例として四十五巻の著者、論文名の目録が最後にのっている。(〇)